

## 12～13世紀における京都の大火災

Conflagration of Kyoto in the 12th - 13th Centuries

片平 博文

Hirofumi Katahira

立命館大学教授 文学部人文学科地理学専攻 (〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1)

Professor, Ritsumeikan University, Dept. of Geography

This report analyzes the conflagrations of Kyoto in the 12th – 13th centuries. More than 30 disastrous fires had been recorded from the early Heian to the end of Kamakura periods. In the large-scale conflagration that occurred in 1177 (Angen 3's fire), a third of Kyoto was destroyed by fire. The fire was expanded to the northwestward of Kyoto by the strong southeast wind. It can also be found out that two more large scale fires like the Angen 3's fire occurred in 1207(the Shogen 1's fire) and 1208(the Shogen 2's fire). Each of these occurred just before a rainy season had set in.

**Key Words :** *conflagration, disaster, reconstruction, historical geography, Kyoto*

### 1. 歴史時代における災害の発生と季節性

歴史時代の記録を見ると、古代以来の日本において、実にさまざまな災害が頻繁に発生してきたことがわかる。広域的な観測システムが整備され、災害予知に関する研究がある程度進展してきた現在でさえ、甚大な被害が生じたというニュース・記事はあとを絶たない。筆者らはこれまで、東京大学史料編纂所作成のデータベース<sup>1)</sup>や、佐々木潤之介ほか<sup>2)</sup>および外園豊基ほか<sup>3)</sup>によって作成された報告書を参考とすることによって、歴史時代に生じた災害と季節性との関係について分析を進めてきた<sup>4)</sup>。その結果、洪水・大雨・風害・旱魃・疫病などの災害は、季節の変化に応じてその頻度を増減させており、とくに初夏から秋季にかけて多く発生していることが明らかとなった。

一方、火災の発生については、厳冬から初夏にかけて頻度が高くなっていることが指摘された<sup>5)</sup>。また火災は、洪水や風害などに比べてその被災区域の特定が比較的容易で、詳細な復原も可能である。小論では、とくに12～13世紀に生じた3つの大火の状況を復原し、それらを当時の天候と関連させることによって、火災が拡大した気象条件の特徴を考察したい。この期間はまた、歴史時代の火災記録が最も多く残されている時代でもある。

### 2. 春に多発した大火

12～13世紀を中心とした時期、一年のうちで火災はいつ多く発生していたのだろうか。図1は、平安初期～鎌倉末期における火災の発生日をすべて新暦(グレゴリオ暦)に変換し、一年を36に区分した旬別にまとめたものである。実際に採用されたデータは、火災の発生が確認された延暦21年(802)～正慶元年[元弘2年](1332)のもので、この期間における総火災件数は1,152件となった。図は、一年を通じて火災が頻繁に発生していた事実を示している。中でも、暖房用の火を使う機会が多くなる冬季を中心に、さらに発生件数が

増えている。しかし特徴的なのは、暖房をほとんど必要としなくなる3月後半から4月、5月になっても、発生件数は決して減少していないことである。そればかりか、年間で最も頻度の高い1月中・下旬のピークを除けば、むしろ厳冬期に比べて発生件数が多くなっている事実も3月以降に認められる。そしてこの傾向は、おそらく梅雨に入って雨の降る日が多くなる6月まで継続している。しかしこの理由については、京都における年間の湿度変化によって説明することが可能である。

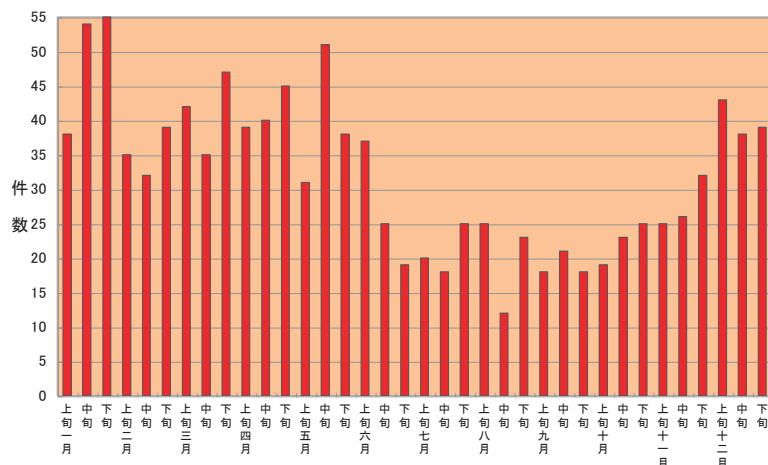


図1 平安～鎌倉期における旬別の火災発生件数  
(東京大学史料編纂所データベースなどにより作成)

図2は、1881～1980年の100年間における京都の月別平均湿度を示したものである<sup>6)</sup>。観測時代の19～20世紀にかけての資料ではあるが、京都における年間の湿度が季節(月)によって大きく変化していることが一目瞭然である。すなわち、一年のうちで月別平均湿度が最も高くなるのは秋季から初冬にかけてで、そのピークは11月(77.8%)となっている。9月から続いてきた高い湿度は11月にそのピークに達した後、1月から2月以降にかけて急速に低くなっていく。グラフは、2月～5月の期間、いずれも年間の平均である74.6%を大きく下回っていることを示している。その中でも3月～5月にかけての時期は、それぞれ70.8%、70.1%、70.3%となってとくに低く、年間で最も乾燥した期間といえる。現在でも、この期間には、頻繁に乾燥注意報が発令されている。歴史時代を通じて、春季から初夏にかけての3月～平年的な入梅期である6月上旬の間に火災が多く発生するのは、この時期に湿度が低くなることと決して無関係ではないだろう。さらにこの季節には、歴史時代を通じて、一度に広い範囲を焼き尽くす大火がしばしば発生していた。

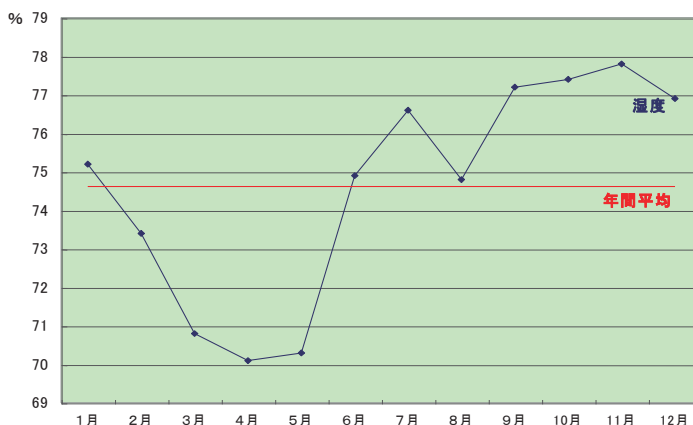


図2 京都における月別平均湿度(1881～1980年)  
(『京都気象100年』により作成)

表1は、大火とみなされる火事について、その発生日(和暦・新暦)や、おおよその焼失場所とその範囲などをまとめたものである。「大火」の定義は必ずしも明確ではないが、ここでは東京大学史料編纂所データベースの網文にある「京都大火」の火災例を一応の基準として、文書中に「大火」もしくは「大焼亡」などとあるもの、或いは「数町」以上の焼失範囲が明らかなものについて取り上げた。さらに、「数百戸」単位以上で家屋が焼亡した事例についても採用した。反対に、例えば仁和元年12月27日(886年2月8日)の西京二条における「延焼二百余家」の火災例(『日本三代実録』)は、決して小規模ではなかったとみなされるものの、ここには含まれていない。表1によると、平安初期～鎌倉末期の期間における大火の件数は32例となるが、そのうち新暦で暖房をほとんど必要としなくなる3月中旬から、入梅期である6月上旬までの3か月間に発生したものは20例、すなわち全体の62.5%にも及んでいることがわかる。これに比べて、図1の同様の季節(3月中旬～6月上旬)における全火災の発生率は、全体の31.5%(363件)にすぎない。両者の数値の比較から、いかにこの季節に大規模な火災が発生しやすかったかを知ることができる。

また表1には、それぞれの大火時の延焼の威力がどの程度であったかを知るために、火が実際に越えた平安京内の街路名とその道幅とが示されている。例えば、延喜14年5月2日(914年6月3日)に発生した火災の炎は、少なくとも10丈幅(約30m)を持つ土御門大路を越えたことになる。平安初期から鎌倉末期までの

表1 平安～鎌倉期における京都の大火

事例	和 暦	新 暦	火災のおおよその場所・被災範囲など	延焼の威力	道幅(丈)	史 料
1	延喜14年5月2日	914年6月3日	左京一・二条、六百十七戸焼亡	土御門大路等	10	日本紀略等
2	寛弘8年11月4日	1011年12月7日	上東門、陽明門、帯刀町、西洞院路、七百余家焼亡	近衛大路等	10	権 記
3	長和5年7月20日	1016年8月31日	従土御門大路至二条北五百余家焼亡	近衛大路等	10	御堂関白記等
4	万寿4年1月3日	1027年2月18日	火起中御門大路富小路、千余家焼亡 三条大路南	二条大路	17	日本紀略等
5	承暦3年2月12日	1079年3月13日	一条南、中御門北、大路以東、洞院以西、三十六町焼亡	近衛大路等	10	百練抄等
6	寛治元年2月12日	1087年3月25日	大炊御門以北、一条以南、西洞院以東、室町以西、大焼亡	中御門大路等	10	中右記
7	寛治元年2月24日	1087年4月6日	京中有焼亡、四条南、五条北、西洞院東、室町西小屋等	町小路等	4	中右記
8	寛治元年12月29日	1088年1月31日	京中大焼亡、中御門東洞院、近衛富小路	勘解由小路等	4	中右記
9	寛治6年3月6日	1092年4月21日	大焼亡、三条南、五条坊門北、東洞院東、京極西	四条大路等	8	中右記等
10	承德2年2月22日	1098年4月2日	万里小路、富小路辺十余町焼亡	姉小路等	4	中右記
11	承德2年3月28日	1098年5月8日	高陽院近辺、中御門堀川、大宮大炊御門焼亡	猪隈小路等	4	中右記
12	康和5年11月16日	1103年12月23日	火起於五条坊門室町、千五條東洞院西辺四五町程、数百家	高辻小路	4	中右記
13	嘉承2年10月14日	1107年11月7日	大炊御門、東朱雀河原、二条、人家数百宇炎上	東京極大路	10	中右記
14	永久5年1月8日	1117年2月18日	法成寺塔有火、火起高倉力テノ小路、火行東及河原、千余家皆	東京極大路	10	殿 曆
15	天治2年12月5日	1126年1月7日	火起五条坊門油小路、及二条河原	東京極大路等	10	十三代要略等
16	久安2年3月18日	1146年5月7日	五条京極辺失火、四条南、五条北、東洞院東、河原西焼失	東京極大路	10	台 記等
17	久安4年3月6日	1148年4月3日	四条油小路出火、六条堀川、東西洞院	東京極大路	10	本朝世紀
18	久安4年3月29日	1148年4月26日	三条末河原辺小屋出火、数百戸焼失、祇園社延焼	鴨川左岸?	?	本朝世紀
19	仁平3年4月15日	1153年5月17日	五条坊門以南、六条以北、東洞院以西、西洞院以東、焼亡	五条大路	8	兵範紀
20	保元2年3月24日	1157年5月11日	焼亡四条以南、五条以北、烏丸以西、大宮以東	五条大路	8	兵範紀
21	安元3年4月28日	1177年6月3日	樋口富小路出火、朱雀門、大極殿等	朱雀大路	28	方丈記等
22	治承2年3月24日	1178年4月20日	自七条高倉西、及朱雀南北五六十町、殆類去年災	東大宮大路	12	玉 葉
23	正治2年11月30日	1201年1月13日	七条坊門櫛笥小路、東河原、北七条坊門、南梅小路、其間一字不残	東京極大路	10	明月記等
24	承元元年4月30日	1207年6月4日	六条坊門室町出火、五条坊門大宮	西洞院大路等	8	明月記等
25	承元2年閏4月15日	1208年6月7日	北小路東洞院出火、南七条、西朱雀	東大宮大路等	12	猪隈関白記等
26	建保元年10月15日	1213年12月5日	南八條小路、北八三条坊門、東八河尻、西八堀川、私地炎上了	東京極大路等	10	仲資王紀等
27	建保6年4月21日	1218年5月24日	三条油小路出火、因幡堂、六条院、河原院等焼失	四条大路等	8	仁和寺日記等
28	承久元年4月2日	1219年5月24日	最勝寺、円勝寺、法成寺、祇陀林寺及び公卿第宅等	鴨 川	川幅	仁和寺日記等
29	寛元4年6月6日	1246年7月27日	四条坊門出火、三条、八条、西洞院、河原等	東京極大路等	10	岡屋関白記等
30	建長元年3月23日	1249年5月14日	姉小路室町出火、三条、八条、西洞院、京極、河東蓮華王院等	鴨 川	川幅	岡屋関白記等
31	正応2年2月19日	1289年3月19日	火起於綾小路町、々以南至于六条、五十余町焼了	五条大路	8	一代要記等
32	元亨3年12月5日	1324年1月10日	四条坊門烏丸出火、楊梅、西洞院、東洞院等	四条大路等	8	花園天皇宸記

32 事例をみると、大火災時の炎は、平安京内の大路（12・10・8丈幅）を難なく越えていたことが明らかである。また、安元3年4月28日（安元の大火）の火災時には、28丈幅（約84m）の朱雀大路も越えていたことがわかる。さらに、建長元年3月23日(1249年5月14日)の火災時には、姉小路室町から出た火が京外に広がり、鴨川を東に越えて蓮華王院にまで及んでいる。同様に、承久元年4月2日(1219年5月24日)の火災も、白河の最勝寺・円勝寺から鴨川を西に越え、法成寺・祇陀林寺や京内にまで及んだ可能性が高い。いざれにしても、大火の場合には、平安京内の広い街路でさえ、防火帯としての機能は十分に果たせなかったものとみなされる。

### 3. 安元3年(1177)4月28日の大火

歴史時代の京都を襲った数多くの火災の中で、最も大規模な一つは、安元3年4月28日(1177年6月3日)夜に発生し、翌日の午前にかけて当時の市街地の約3分の1を焼き尽くしたいわゆる安元の大火であろう。この大火については、『玉葉』『愚昧記』<sup>7)</sup>『清辨眼抄』『吉記』『顕広王記』『仲資王記』などの古記録や、『方丈記』『平家物語』などの文学作品からその詳細な内容を知ることができる。『方丈記』<sup>8)</sup>には、「風烈しく吹きて、静かならざりし夜、戌の時許、都の東南より火出で来て、西北に至る。はてには、朱雀門・大極殿・大学寮・民部省などまで移りて、一夜のうちに塵灰となりき」とあり、火災が南東方向からの強い風を受けて、市街地北西部の大内裏にまで及んだことがわかる。火元は樋口富小路付近で、そこから「吹き迷う風に、とかく移りゆくほどに、扇をひろげたるがごとく、末広に」広がっていった。その時の様子は、「遠き家は煙に咽び、近きあたりはひたすら焰ほを地に吹きつけたり。空には灰を吹き立てたれば、火の光に映じて、あまねく紅なる中に、風に堪えず、吹き切られたる焰、飛ぶが如くして一二町を越えつゝ移りゆく。その中の人、現しごころあらむや」といった状況であった。

また、藤原(九条)兼実の日記である『玉葉』<sup>9)</sup>の安元3年4月28日条には、「亥刻（『方丈記』を除いて、他の古記録は亥刻とする）、上方有<sub>レ</sub>火、樋口富小路辺云々、暁更人告云、夜前火猶未<sub>レ</sub>消、京中人屋多以焼亡已、及<sub>レ</sub>内裏、閑院云々、余騒起見<sub>レ</sub>之、火勢彌盛、其焰靡<sub>レ</sub>乾方<sub>レ</sub>、閑院有<sub>レ</sub>危歟」とあり、夜の10時頃に樋口富小路付近で火災が発生し、烈しい南東風にあおられて北西方向に類焼していったことがわかる。

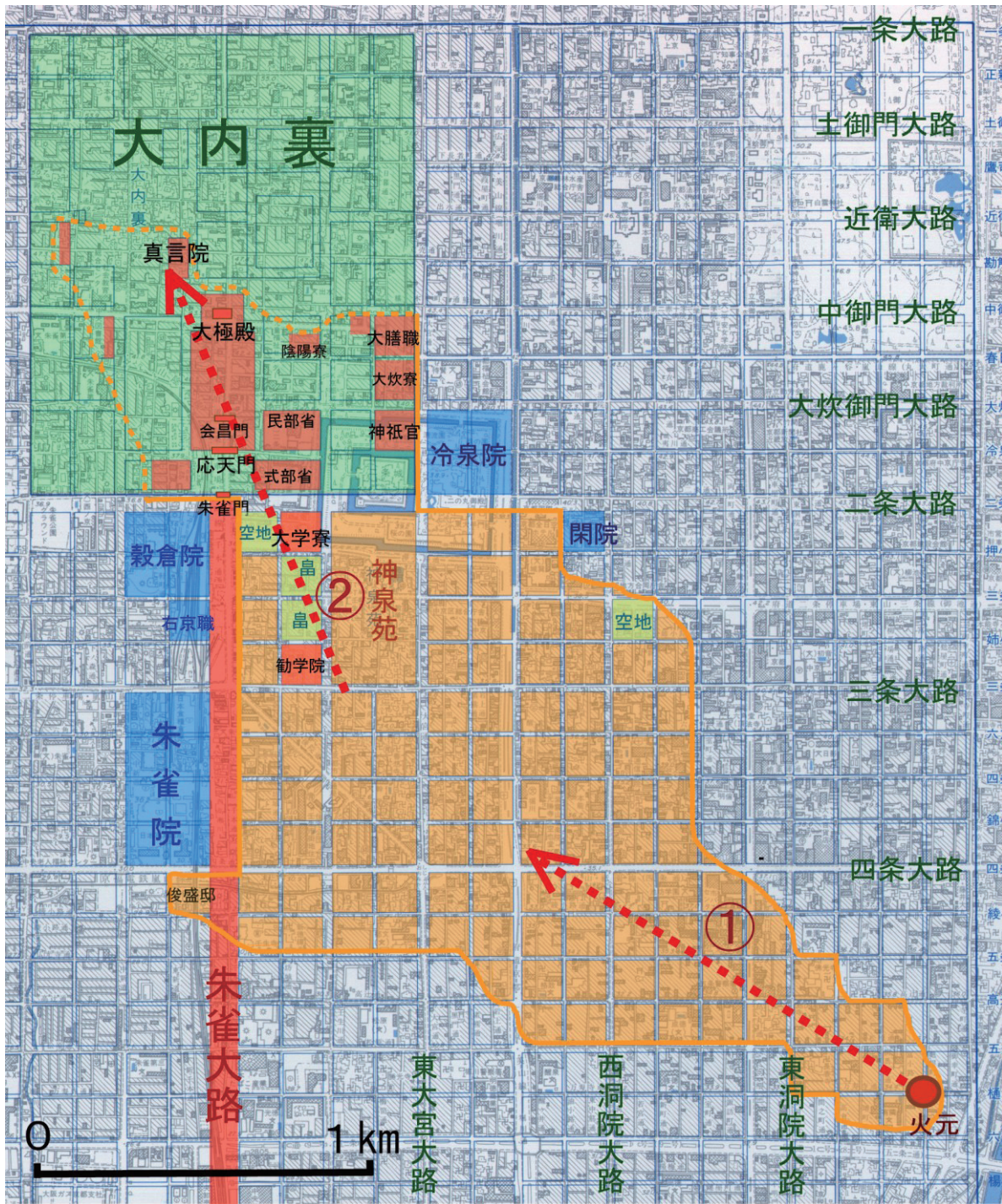


図3 安元3年(1177)の大火による焼失範囲

(『清辨眼抄』などにより作成、)

途中 14 に及ぶ公卿の邸を焼き尽くし(『方丈記』は 16 邸、『清辨眼抄』は 13 邸とする)、やがて大内裏の大極殿までが焼失した。この火災は翌朝になってもまだ鎮火していなかったようで、兼実は 4 月 29 日(新暦 6 月 4 日)の日記に「至辰刻猶未消」、すなわち翌 29 日の午前 8 時頃になってもまだ鎮火していないと記している。火元については、『顕広王記』に「火起五條富小路」<sup>10)</sup>とあるが、『方丈記』『玉葉』『愚昧記』『仲資王紀』などはいずれも樋口富小路とする。五条大路と樋口小路とは南北に隣り合わせの街路であること、さらに『清辨眼抄』に付された火災範囲を示す挿図<sup>11)</sup>などからみて、樋口富小路の近辺が火元であったことは間違いない。

図 3 は、『清辨眼抄』の挿図と、『玉葉』以下の古記録をもとにして復原した安元の大火による焼失範囲

である<sup>12)</sup>。また大内裏内の焼失範囲については、『玉葉』『清辨眼抄』『愚昧記』『顕広王記』『仲資王記』に出てくる施設名を最大限採用した。火は、樋口富小路付近に起こり、南東方向からの強い風を受け、その延焼幅を扇形に拡大しながら、北西方向に向かって加速度的に広がっていったことがわかる。延焼の速度はかなり速かったらしく、『顕広王記』4月28日条の「目宛時寅刻（自亥時及寅之刻）、炎煙散余炎、遂及禁中」<sup>13)</sup>、また『愚昧記』5月5日条の「去廿九日寅刻大極殿火災何崇哉」<sup>14)</sup>などの記述から、29日の午前4時頃には炎が大内裏内の大極殿にまで達していた。樋口富小路—大極殿間の直線距離は地形図上で3,125mとなるから、いま仮に延焼の速度が一定であったと仮定すれば、時速520mもの速度で炎のフロンティアが進んだことになる。その間、炎は東洞院大路・西洞院大路・東堀川の流路を含む堀川小路・四条大路・三条大路などの8丈幅を有する街路や、12丈幅の東大宮大路を容易に越えた。さらに四条大路の南では28丈幅の朱雀大路を越えて、右京に位置する藤原俊盛の家屋が焼失している。

『清辨眼抄』の挿図によると、朱雀大路の西側で焼失したのは、この俊盛の家屋だけとなっており、『玉葉』以下の古記録類にも、他に右京側の被害は記載されていない。しかし、そのすぐ北側にはおそらく8町域もの広大な区画を占める朱雀院があったにもかかわらず、焼失範囲としては描かれていない。俊盛の家屋が焼けたのに対して、朱雀院が同じ火災時の風下側にあつて全く被害を受けていないのはむしろ不自然といえる。そこで朱雀院に関する11世紀以降の記録をみると、ここには平安前期から長い馬場があり、承暦3年(1079)には賀茂祭のための試走を行っていたことが確認できる<sup>15)</sup>。また大火直前の安元3年(1177)1月30日には、朱雀院の鎮守である石上明神が焼亡している<sup>16)</sup>。さらに元久2年(1205)閏7月6日には、そこを遊獵地とするために周囲に築垣が築かれた<sup>17)</sup>。これらの事実から、元久2年以前の朱雀院の周囲には垣根さえなかったことが明らかで、おそらく安元3年1月における鎮守焼失の頃から、同院の区域内に密集した家屋が建ち並んでいた可能性はむしろ低い。朱雀院の北側に位置していたとされる右京職・穀倉院等の施設に関しても、はたして安元3年の時点でその地に存在していたかどうかを含めて、火災記録が認められないことに対する検討の余地が残る。

朱雀大路の場合と同様、同じ風下側にあつて炎が及んできたと考えられる二条大路の油小路—大宮大路間もまた、焼失範囲が直線上に示されている。二条大路を挟んだ堀川小路—大宮大路間の北側の地には、平安前期以来冷泉院が存在していた。この部分は、17丈幅を持つ二条大路が防火帯となって火災から逃れた可能性も考えられるが、その北西側の内裏南東部では神祇官や大膳職等に延焼しており、両者に挟まれた冷泉院の区域に火災が及んでいないのはむしろ不自然である。この敷地内における火災時点での建物の存在は確認できないが、4町域を占めるこの広大な敷地には大きな池のあったことがわかっている。例えば延喜17年(917-18)の大旱魃時には、とくに平安京二条以北の井戸や泉はことごとく涸れてしまったが、冷泉院の池には水が豊富に蓄えられていたらしく、陽成院上皇は庶民のために門戸を開いて池の水を汲ませたという<sup>18)</sup>。最近の発掘調査によると、冷泉院の池のなごりは、湿地状態となって、平安後期～鎌倉・南北朝・室町後期にかけても存在していたようである<sup>19)</sup>。大内裏南東部の二条以北に火災が広がらなかったのは、或いはこの池の存在が大きく関係していたのかもしれない。

いずれにしても、安元の大火は市街地の南東部から北西方向に広がり、大内裏の一部にまで及んだことが明らかである。しかし、延焼範囲を示した図3を改めてみると、火災発生から間もなくと大内裏付近に火が及んだ時点とでは、その延焼の方向にわずかながら違いのあることが読み取れる。火災時の風向について、『愚昧記』は「巽風也」<sup>20)</sup>と書いているように、確かに延焼の方向は北西に向かって広がっていった。しかしよくみると、延焼の中心は、矢印①のように北西よりもやや西側に向かって伸びている。これは当時の風の方向が、正確には南東よりもやや東側に偏って吹いていたことを示している。一方、大極殿付近の建物への類焼状況について、『清辨眼抄』は時間の経過を踏まえながら以下のように記述している。すなわち、「先大学寮、次応天門并東西楼。此間真言院焼亡、自<sub>一</sub>応天門<sub>一</sub>移<sub>一</sub>会昌門<sub>一</sub>。次移<sub>一</sub>大極殿<sub>一</sub>。其間東西廊焼亡。大極殿焼亡。神祇官大膳職共焼亡。此間又式部省又民部省焼亡。又右兵衛府典薬寮門等四足焼亡。此後朱雀門焼亡」<sup>21)</sup>とあって、この付近にあった主要な建物ではまず、大内裏のすぐ南側に位置していた大学寮に火の手が上がった。記述によると、大学寮の次に燃えたのは近くに位置していた朱雀門ではなく、朝堂院南端にあった応天門およびその東西の二楼（栖鳳楼と翔鸞楼）であった。この火が会昌門に移り、続いて朝堂院（八省院および廊）を焼きながら北に進み、ほどなく大極殿を焼亡させることになる。しかし、応天門の火が会昌門に移ると前後して大極殿の北側にあった真言院が焼けている。真言院は、朝堂院の北側に位置する大極殿からの火によって類焼したのではなく、応天門の火が直接飛び火することによって焼亡したと考え

られる。また朝堂院南側の会昌門から、その北側に位置する大極殿が焼亡する間に、神祇官・大膳職・式部省・民部省などの建物も焼け落ちた。そして、朱雀門に火が及んだのは、以上の建物が焼け落ちた後のことであった。『清癡眼抄』には、大内裏の南側に位置する大学寮付近の土地利用が描かれているが、大学寮のすぐ西側は「空地」、また南側の二町分は「畠」となっている。南東方向からの強風を受けて迫ってきた炎が、距離的に近い朱雀門ではなく、先に大学寮→応天門と延焼したのは、この付近の土地利用が大きく関係していたものと考えられる。

以上、大学寮→応天門および二樓→真言院、また大学寮→応天門および二樓→会昌門という北北西に向かって広がっていった延焼の順序を考慮すると、大内裏付近に火が迫った時間（寅刻すなわち午前4時頃）の風は、図3矢印②のように南南東方向から吹いていたものと考えられることができる。『愚昧記』の作者である藤原（三条）実房は、火元が樋口富小路であることを知った後に、「火気尤猛烈、向乾焼行、以人令見之処、自油小路趣上方云々、皇居有恐歟。仍退去、帰家着冠直衣」と記している<sup>22)</sup>。「皇居」というのは当時の内裏があった閑院のことで、場所は二条南西洞院西に位置していた。実房は、閑院内裏に火の手が及ぶことを懸念して家人にその様子を見に行かせたのであろう。報告は、油小路から上方、すなわち北に向かって火が広がってきているというもので、それを受けて大あわてで身支度を整えている。家人は、おそらく閑院近くまで行ってその様子を見てきたのだろう。油小路から閑院に向かって火が北に迫り上がってきた様子は、大内裏付近で北北西に向かって類焼が進んだことを示す図3の状況とも見事に一致する。

#### 4. 南東方向から広がった大火

これまでみてきたように、安元の大火は南東方向からの強風を受けて北西方向に燃え広がった京都の歴史上最悪かつ最大規模の火災のひとつであるが、これと同じような特徴を持つと考えられる大火が少なくとも他に2事例確認できる。それは、承元元年4月30日（1207年6月4日）と、翌承元2年閏4月15日（1208年6月7日）に発生した火災である。

まず承元元年4月の大火についてであるが、『明月記』の同日条には「鶏鳴之程坤有火、依物詣不見、後聞、自丹後二位宅業兼居住六条坊門、大宮東五条坊門南、皆以焼亡」<sup>23)</sup>、また『仲資王記』には「□□大焼亡也、火起六条坊門室町楊梅大宮、并五条坊門大[宮]等云々、二品尼公家、并治部卿家等全焼了歟」<sup>24)</sup>とそれぞれ記載されており、夜明け頃に六条坊門室町付近で発生した火が、大宮大路と五条坊門小路に向かって西および北側に広がっていったことがわかる。六条坊門室町付近で出火し、このような範囲を焼き尽くした火炎は、南東方向からの風によって広がっていったことが明らかであり、地図上に復原するとほぼ図4のようになる。その焼失域の北側は、一部、安元3年の大火によって焼失した区域と重なっている。

また、翌承元2年閏4月の火災については、『猪隈関白記』に「亥時許南方有火事、七条北東洞院辺云々、于時大風吹翼風也、限東東洞院、限南七条、限西朱雀、限北四条、大焼亡也、終夜焼亡也」<sup>25)</sup>として、次に焼失した主な公卿等の家（邸宅）を具体的にあげている。これによって、焼亡区域は東洞院、七条、朱雀、四条の各街路に囲まれた範囲であることがわかる。同じ火災について『明月記』は、「亥時許南方有火、風猛烈、煙炎如飛、戴冠参内、雖程遙炎上大風非尋常、依思警衛之職強参入、不見一人、火漸出大宮云々、暫候之間、及朱雀之由聞之退出、

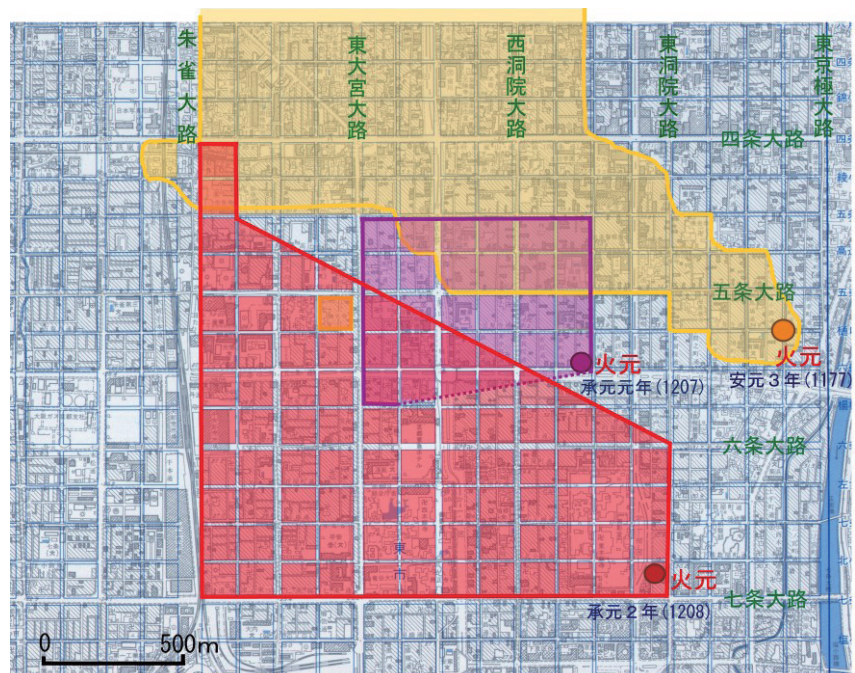


図4 承元元年(1207)・承元2年(1208)火災による焼失範囲  
 (『明月記』『猪隈関白記』により作成)

火猶不滅、後聞、火出自北小路東洞院、七条東西十二町、洞院西、朱雀東、朱雀南北十二町、七条以北、自六条東洞院至于五条坊門朱雀辺、すぢかへて融其中、貴賤上下不可勝計云々、……」<sup>26)</sup>と記している。両者の記録から、火事は午後10時頃に起きたこと、この夜は南東の風が非常に強く吹いていたこと、夜を通して燃え続けていたことなどがわかる。また、この火災による焼失区域北部の境界線は、『明月記』に「六条東洞院から五条坊門朱雀付近にかけて、斜めに通っている」とあることから、図4のような一部街路に沿っていない焼失区域を復原することが可能である。この火災が鎮火したのは、『猪隈閑白記』によれば夜明けになってからであった。

図4に示された2つの大火の焼失区域は、いずれも文書からの復原であるために幾何学的となっているが、実際にはこれほど直線的ではなかったものと考えてよいだろう。しかしこれらの大火は、結果的にそれぞれ東大宮大路(12丈幅)と朱雀大路(28丈幅)という、平安京の中では比較的幅の広い街路によって食い止められていたことがわかる。またこれらの大火は、いずれも南東方向からの風によって燃え広がり、しかも新暦に変換して6月4日と6月7日という全く同じ季節に発生したものと見える。さらに、すでにみた安元の大火もまた新暦の6月3日に発生し、しかも強い南東風によって焼失区域が北西に広がるという共通した特徴を持つ火災であった。では、6月上旬というのは、どのような季節であったのだろうか。以下では、安元3年(1177)、承元元年(1207)、承元2年(1208)の初夏を中心とする時期の天候を振り返ることによって、3つの大火の共通性を分析してみたい。

### 5. 6月上旬の天候と大火

表2は、安元3年における和暦3月～6月(新暦4月8日～8月2日)の4か月間にわたる天候を、『玉葉』および『愚昧記』の記載に基づいて復原したものである。表は、和暦と新暦とを対比させ、古記録から得られた日々の天候を判定した。「天気」欄のうち、濃い青は雨が記録された日、また薄い青(水色)は小雨だと確認された日をそれぞれ示している。また、天候の記載がない日については「-」で示した。さらに、「備考」欄が黄色で塗りつぶされた日は、風烈・雷雨・降雹などが確認されたことを示している(表3・4についても同様)。ここでは以下、現在の季節との関連をみるために、すべて新暦によって表記する。

安元3年の天候は、新暦4月下旬から5月のはじめにかけて雨が比較的少なく、晴天の日が多かった。しかし、平年的には晴天が多くなるはずの5月については、むしろ月初めを除いて不安定な天候が続き、現在で言う「走り梅雨」のような状態であった。一方、4月15日・17日・20日・5月6日・24日などには、強

表2 安元3年(1177)大火前後の天候

和暦	新暦	天気	備考	和暦	新暦	天気	備考	和暦	新暦	天気	備考	和暦	新暦	天気	備考
3月1日	4月8日	晴時々曇		4月1日	5月7日	晴のち曇、雨	夜から雨	5月1日	6月6日	晴時々曇		6月1日	7月5日	晴	
2日	9日	晴		2日	8日	曇時々雨		2日	7日	晴のち曇		2日	6日	雨	小雨
3日	10日	晴		3日	9日	晴、夜に雨	小雨	3日	8日	雨	風烈	3日	7日	雨のち曇	
4日	11日	一		4日	10日	晴		4日	9日	晴	風駈	4日	8日	晴	
5日	12日	雨のち晴		5日	11日	晴		5日	10日	晴時々曇、雨	一時小雨	5日	9日	晴	
6日	13日	晴		6日	12日	晴、夜から雨	大雨	6日	11日	晴		6日	10日	晴一時雨	小雨
7日	14日	雨		7日	13日	雨のち晴		7日	12日	晴時々曇		7日	11日	曇時々雨	小雨
8日	15日	晴時々曇	風烈	8日	14日	晴のち雨		8日	13日	晴		8日	12日	晴	
9日	16日	晴		9日	15日	雨のち晴		9日	14日	晴		9日	13日	晴	
10日	17日	晴時々曇	雷	10日	16日	晴		10日	15日	晴のち雨		10日	14日	晴	
11日	18日	晴		11日	17日	曇のち雨	夜、大雨	11日	16日	雨	終日	11日	15日	晴	
12日	19日	晴		12日	18日	雨のち曇	小雨	12日	17日	晴		12日	16日	曇時々雨	小雨
13日	20日	曇時々雨	雷	13日	19日	晴		13日	18日	晴		13日	17日	曇時々雨	小雨
14日	21日	晴のち雨	小雨	14日	20日	晴		14日	19日	晴		14日	18日	晴	
15日	22日	晴		15日	21日	晴		15日	20日	曇のち雨		15日	19日	晴	
16日	23日	晴		16日	22日	曇時々雨	小雨	16日	21日	曇時々雨、雨	一時小雨	16日	20日	晴	
17日	24日	晴		17日	23日	雨	小雨	17日	22日	曇のち雨		17日	21日	晴	
18日	25日	晴		18日	24日	曇時々晴、雨	一時雨・風烈(竜巻)	18日	23日	晴		18日	22日	晴	
19日	26日	晴のち雨	小雨	19日	25日	晴		19日	24日	曇		19日	23日	晴	
20日	27日	晴		20日	26日	晴		20日	25日	雨	大雨	20日	24日	晴	
21日	28日	晴		21日	27日	雨		21日	26日	雨のち曇		21日	25日	晴	
22日	29日	晴		22日	28日	晴時々曇		22日	27日	晴		22日	26日	晴	
23日	30日	晴		23日	29日	曇のち晴		23日	28日	晴		23日	27日	晴	
24日	5月1日	晴		24日	30日	晴のち曇、雨	小雨、夜晴	24日	29日	晴		24日	28日	曇時々晴	雷
25日	2日	晴		25日	31日	晴		25日	30日	晴のち曇		25日	29日	晴	
26日	3日	晴		26日	6月1日	晴		26日	7月1日	雨のち曇		26日	30日	晴のち曇、雨	夜に雨
27日	4日	晴		27日	2日	晴		27日	2日	晴		27日	31日	雨のち晴	
28日	5日	晴のち雨	夜から大雨	28日	3日	曇時々晴	大火災	28日	3日	晴/雨	?	28日	8月1日	一	
29日	6日	雨のち晴	風烈	29日	4日	曇時々雨	小雨・風烈	29日	4日	晴		29日	2日	晴	
				30日	5日	晴のち雨									

(『玉葉』および『愚昧記』により作成)

風の吹き荒れる日や雷などが記録され、大気不安定な日も少なくなかったことを示している。中でも5月24日の強風は竜巻だった可能性が高く、例えば『百練抄』には「未刻暴風、其声如炎上、三条大宮人家門多顛倒」<sup>27)</sup>、また『頭広王記』には「未時辻風、人屋少々吹壊、自神泉池、如蕙者出上、順風飄飄、其色黒々、無落墮所、遂差辰己方、飛去云々」<sup>28)</sup>などと描写されている。安元3年の春～初夏は、このような大気不安定さと、「走り梅雨」のような雨の多い日とを繰り返しながら4月・5月と経過し、5月30日夜から晴天(曇時々晴も含めて)が続いた5

表3 承元元年(1207)大火前後の天候

和暦	新暦	天気	備考	和暦	新暦	天気	備考	和暦	新暦	天気	備考
3月1日	4月6日	晴		4月1日	5月6日	晴のち曇		5月1日	6月5日	雨のち晴	
2日	7日	晴		2日	7日	雨のち晴	小雨	2日	6日	晴	
3日	8日	曇時々雨		3日	8日	曇時々雨		3日	7日	曇のち雨	
4日	9日	雨のち晴れ	前夜に雨	4日	9日	晴		4日	8日	雨のち晴	
5日	10日	晴		5日	10日	晴		5日	9日	晴	
6日	11日	晴		6日	11日	曇		6日	10日	晴	
7日	12日	晴時々曇	雨気有	7日	12日	晴		7日	11日	曇一時雨	
8日	13日	晴一時雨		8日	13日	晴		8日	12日	曇時々雨	
9日	14日	晴		9日	14日	晴		9日	13日	晴	
10日	15日	晴		10日	15日	晴		10日	14日	雨のち晴	
11日	16日	晴		11日	16日	晴		11日	15日	雨のち晴	
12日	17日	曇のち雨		12日	17日	晴		12日	16日	雨	
13日	18日	晴		13日	18日	晴		13日	17日	晴のち雨	雹降
14日	19日	曇		14日	19日	晴		14日	18日	晴	
15日	20日	晴		15日	20日	晴		15日	19日	晴	
16日	21日	晴		16日	21日	雨のち曇		16日	20日	晴のち雨	夜・大雨
17日	22日	晴		17日	22日	晴	炎旱	17日	21日	曇	
18日	23日	曇一時雨	小雨	18日	23日	晴	↓ 下民愁悶	18日	22日	曇のち晴	
19日	24日	晴		19日	24日	晴	↓ 悶	19日	23日	晴	
20日	25日	曇のち晴		20日	25日	晴	↓ 炎旱	20日	24日	雨	大雨
21日	26日	晴		21日	26日	晴		21日	25日	晴	
22日	27日	晴		22日	27日	晴		22日	26日	晴時々曇	
23日	28日	晴		23日	28日	晴		23日	27日	晴	
24日	29日	晴		24日	29日	曇		24日	28日	晴	
25日	30日	曇のち雨		25日	30日	曇のち雨		25日	29日	晴のち雨	大雨
26日	5月1日	晴		26日	31日	曇時々雨		26日	30日	晴	
27日	2日	晴		27日	6月1日	晴		27日	7月1日	雨	時々小雨
28日	3日	晴		28日	2日	晴		28日	2日	曇時々晴	
29日	4日	曇のち雨		29日	3日	晴		29日	3日	晴	
30日	5日	晴		30日	4日	雨	大火災				

(『明月記』により作成)

日目の夜、すなわち6月3日夜の南東風が強く吹き荒れる中で大火が発生した。

安元3年の新暦6月は、雨の続くことがむしろ少なく、雨と雨との間には3～4日程度の晴天がたびたびあった。また7月18日以降は10日間以上も雨が降らず、この年の梅雨は実質的には7月半ばに明けていたものと考えられる。反対に、梅雨入りとなった日は、5月中旬以降における数日間にもわたる晴天後の雨天日を考慮するならば、5月22日か6月4日となろう。ただし、5月22日～30日にかけては雨が降ってもまだ一時的な小雨の日が多かったこと、他方6月4日～8日にかけては曇の日を挟む雨天が続いたことなどを考慮するならば、この年の梅雨入りは6月4日頃であった可能性が高い。

同様に表3は、『明月記』から得られた承元元年における大火前後の天候を、和暦3月～5月の3か月間にわたって復原したものである。この年には、新暦の4月～5月はじめにかけては比較的雨の日が多く、逆に5月9日以降は晴天の日が続いた。5月30日までに雨が降ったのは、21日に記録された1回のみである。

『明月記』作者の定家はこの間の天候について、5月30日(和暦4月25日)の記述に「巳以後雨初降、炎旱涉旬、下民愁悶」<sup>29)</sup>と書き、雨が全く降らずに真夏のような暑さが連日続いて、それは10日程度にも及んだと表現している。そして、

5月30日の昼前になって久しぶりに雨がもたらされた。承元元年の梅雨入りについては比較的明瞭で、この日以降に雨の日が一気に多くなる6月4日として間違いはないだろう。大火が発生したのは、6月4日の「鶏鳴之程」、すなわち夜明け近くであった。『明月記』によれば、この日の天気は「自曉雨降」ということであるから、この雨の降り始めと大火の発生とは、ほとんど時を同じくしていたことが確認される。

表4 承元2年(1208)大火前後の天候

和暦	新暦	天気	備考	和暦	新暦	天気	備考	和暦	新暦	天気	備考
4月1日	4月24日	雨のち晴	大雨・雷	閏4月1日	5月24日	晴		5月1日	6月22日	晴	
2日	25日	晴		2日	25日	晴		2日	23日	晴	
3日	26日	晴		3日	26日	晴		3日	24日	雨	
4日	27日	晴		4日	27日	晴		4日	25日	雨	
5日	28日	雨のち曇	大雨	5日	28日	晴		5日	26日	雨のち晴	
6日	29日	晴		6日	29日	晴		6日	27日	晴	
7日	30日	曇時々雨		7日	30日	晴一時雨	小雷雨	7日	28日	曇時々雨	
8日	5月1日	晴		8日	31日	雨	雷	8日	29日	雨	
9日	2日	晴のち曇		9日	6月1日	晴		9日	30日	曇のち雨	大雨
10日	3日	晴		10日	2日	晴		10日	7月1日	晴	
11日	4日	曇		11日	3日	曇一時雨		11日	2日	晴	
12日	5日	晴		12日	4日	晴		12日	3日	晴	
13日	6日	曇時々雨	夜大雨	13日	5日	晴		13日	4日	晴	
14日	7日	晴		14日	6日	晴		14日	5日	雨のち晴	
15日	8日	晴		15日	7日	晴午後一時雨	大火災	15日	6日	晴一時雷雨	大雨・雷
16日	9日	晴		16日	8日	雨		16日	7日	晴	
17日	10日	曇時々雨		17日	9日	晴		17日	8日	晴一時雷雨	雷
18日	11日	晴のち雨		18日	10日	曇時々雨		18日	9日	晴一時雨	小雨
19日	12日	雨	雹・雷	19日	11日	曇のち雨	夜に晴	19日	10日	晴	
20日	13日	晴		20日	12日	晴		20日	11日	晴	
21日	14日	晴		21日	13日	晴		21日	12日	晴	
22日	15日	雨のち曇	大雨・雷	22日	14日	晴		22日	13日	晴	
23日	16日	雨のち晴	大雨・雹・雷	23日	15日	晴		23日	14日	雨/晴	?
24日	17日	晴		24日	16日	晴		24日	15日	晴	
25日	18日	晴のち曇		25日	17日	晴		25日	16日	晴	
26日	19日	雨	大雨	26日	18日	雨		26日	17日	晴	
27日	20日	晴		27日	19日	曇時々雨		27日	18日	晴	
28日	21日	晴		28日	20日	曇		28日	19日	晴	
29日	22日	晴		29日	21日	曇時々晴		29日	20日	晴	
30日	23日	晴						30日	21日	雨	

(『明月記』『猪隈関白記』により作成)



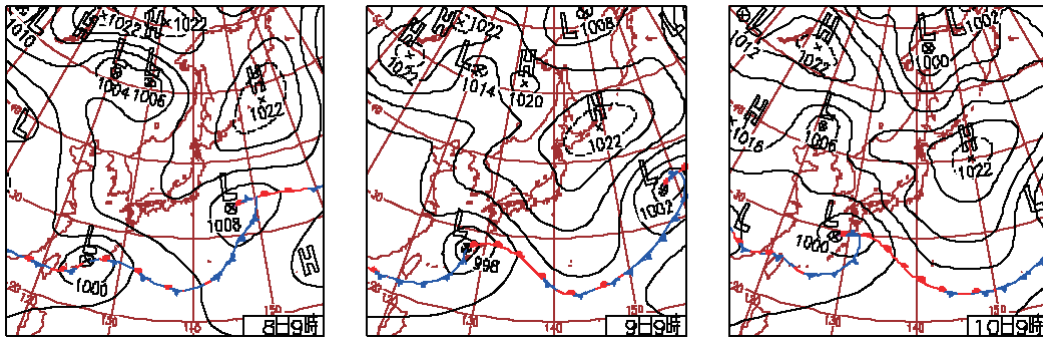


図5 2003年6月8日～10日の天気図

(気象庁ホームページ「日々の天気図」による)

さらに表4は、『明月記』『猪隈関白記』から得られた承元2年における大火前後の天候(和暦の4月・閏4月・5月)を復原したものである。この年の新暦5月以降も、安元3年の時と同様に大気不安定な状態がしばしば生じ、例えば5月12日・15日・16日・30日・31日などには降雹や雷雨があった。この年の梅雨入りは、6月12日～17日にかけて晴天が続いているため判別しにくいものの、晴天の日がしばらく続いた後の5月30日または雨の頻度が高くなる直前の6月7日のいずれかであろう。ただし、雨天日の頻度や雨の降り方などからみると、6月7日とするのがより適当とも考えられる。

このようにみえてくると、南東方向からの風にあおられて延焼したこれら3つの大火は、いずれも梅雨入り直前か、梅雨入り直後の最初の晴れ間が続いたすぐ後に発生していたことが明らかとなる。さらに3つに共通していることは、大火が起きる直前に、数日間わたって必ず晴天が続いていたことである。例えば、安元3年の大火時は5月30日夜～6月3日当日までの約4日間、承元元年の大火時は6月1日～3日の約3日間、そして承元2年の大火時は6月4日～7日午前にかけての3日半といった具合である。これらの状況に合致する気象条件は、おそらく大きな高気圧が数日をかけて日本列島を被った後、梅雨前線を伴った低気圧が接近してきて雨を降らせるようなケースであろう。最近の天候記録を振り返ってみれば、例えば2003年6月の状況がそれにほぼ近いものとなる。

図5は、2003年6月8日～10日のそれぞれ午前9時における天気図<sup>30)</sup>を示したものである。この年には、近畿地方は6月10日、中国・四国・東海・関東・甲信越地方とともに梅雨入りした。また、それ以前の天候はオホーツク海から東北地方沖を中心とする大きな高気圧に被われ、近畿地方はおおむね晴れた日が続いている。一方で、その前の7日には寒気が入って大気は不安定となり、西日本から関東地方の広い範囲で雷雲が発達し、京都でも直径10mm大の雹が降っている。梅雨入り後は梅雨前線が日本列島付近に停滞し、6月後半には各地で大雨がもたらされた。梅雨入りした日の2003年6月10日の天気図は、中国・四国地方東部から近畿地方、東海地方西部などに向けて、高気圧の周囲を廻る、あるいは低気圧に巻き込まれる風が南東方向からまさに入り込みやすい状況を示している。大きな移動性の高気圧がゆっくりと日本列島を通過し、その後から梅雨前線を伴う低気圧が近づいてきたような場合にも、同様のことが指摘される。安元3年、承元元年・承元2年の各大火が発生したときも、おそらくこのような気象条件と大差がなかったものと考えられる。今後、歴史時代に起きた火災の状況と当時の天候とをともに復原し、それらを相互に関連させることによって、過去に発生した火災のさらに詳細な分析が可能となるに違いない。

#### 参考文献

- 1) 「東京大学史料編纂所データベース」 URL:<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller> のうち、古記録フルテキストDB、古文書フルテキストDB、編年史料網文DB、近世編年DBなど。
- 2) 佐々木 潤之介ほか：(2000)日本中世後期・近世初期における飢餓と戦争の研究―史料所在調査と年表作成から―、科学研究費研究成果報告書, pp.1-227+92, 2000.
- 3) 外園 豊基ほか：日本中世における民衆の戦争と平和, 科学研究費研究成果報告書, pp.1-482, 2003.
- 4) 片平博文・吉越昭久ほか：京都における歴史災害の季節性(立命館大学 COE 推進機構・立命館大学歴史都市防災研

- 究センター：21世紀COEプログラム「文化遺産を核とした歴史都市の防災研級拠点」平成17年度報告書，pp.17-20，2006。片平博文・吉越昭久ほか：京都における歴史時代の災害とその季節性，京都歴史災害研究6，pp.1-8，2006。片平博文：平安京の祭礼と歴史災害（立命館大学・神奈川大学21世紀プログラムジョイント・ワークショップ：歴史災害と都市—京都・東京を中心に—），pp.11-19，2007。片平博文：歴史時代の災害と稲荷祭，朱50，pp.136-154。など。
- 5) 片平博文・吉越昭久ほか：京都における歴史時代の火災データベース—9～16世紀の史料を中心に—（立命館大学COE推進機構・立命館大学歴史都市防災研究センター：21世紀COEプログラム「文化遺産を核とした歴史都市の防災研級拠点」平成18年度報告書），pp.21-24，2007。
  - 6) 京都地方気象台編：京都気象100年，日本気象協会関西本部，pp.21-100，1981。
  - 7) 『愚昧記』については、高橋昌明編：『愚昧記』治承元年秋冬記の翻刻と注釈，文化学年報19，pp.33-102，2000。および高橋昌明・森田竜雄編：『愚昧記』安元3年(治承元)春夏記の翻刻と注釈(上)・(下)，文化学年報，22・23，pp.41-94，pp.29-110。の各翻刻本を使用した。
  - 8) 西尾 實校注：日本古典文学大系38 方丈記・徒然草，岩波書店，1957。
  - 9) 国書双叢書刊行会編：玉葉 第二，名著刊行会，1988。安元3年4月28日条。
  - 10) 続史料大成刊行会：続史料大成 伯家五代記・後奈良天皇宸記，臨川書店，1967。『顕広王記』安元3年4月28日条。
  - 11) 塙保己一編：新校群書類従 卷108，内外書籍，1932。
  - 12) ベースマップには、古代学協会・古代学研究所編：平安京提要，角川書店，1994。所収の「平安京条坊復元図」を用いた。図4についても同様。
  - 13) 前掲10)，安元3年4月28日条。
  - 14) 前掲7)，高橋昌明・森田竜雄編：『愚昧記』安元3年(治承元)春夏記の翻刻と注釈(下)，文化学年報23，p.65。
  - 15) 増補史料大成刊行会：史料大成 水左記，臨川書店，1965。の承暦3年(1079)4月3日条には「於朱雀院、可被走馬足等」とあって馬場の施設があったことを示している。
  - 16) 黒板勝美・国史大系編修会編：新訂増補国史大系 百練抄，吉川弘文館，1979。には、安元3年正月30日とあるが、この年の正月は29日までであった。あるいは、2月1日の記事なのかもしれない。
  - 17) 国書刊行会編：明月記1，国書刊行会，1911。元久2年閏7月6日条。
  - 18) 黒板勝美・国史大系編修会編：新訂増補国史大系 日本紀略3(後篇)，吉川弘文館，1980。延喜17年12月19日条。
  - 19) 京都市埋蔵文化財研究所：平安京冷泉院跡・史跡旧二条離宮現地説明会資料，2002。京都市埋蔵文化財研究所：史跡旧二条離宮(二条城)，京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-15，pp.1-68，2003。
  - 20) 前掲13)，pp.52-53。4月28日条。
  - 21) 前掲11)。
  - 22) 前掲13)，P.53。
  - 23) 前掲16)。承元元年4月30日条。
  - 24) 東京大学史料編纂所編：大日本史料 第4編之9，東京大学出版会，1968。承元元年4月30日条。
  - 25) 東京大学史料編纂所編：大日本古記録 猪隈関白記4，岩波書店，1980。承元2年閏4月15日条。
  - 26) 前掲16)。承元2年閏4月15日条。
  - 27) 前掲15)。安元3年4月18日条。
  - 28) 前掲10)。『顕広王記』安元3年4月18日条。
  - 29) 前掲16)。承元元年4月25日条。
  - 30) 気象庁ホームページ、気象統計情報の「日々の天気図」、[URL:http://www.data.jma.go.jp/fcd/yoho/hibiten/index.html](http://www.data.jma.go.jp/fcd/yoho/hibiten/index.html) による。